

氏名・（本籍） 松田 凌（新潟県）

学位の種類 博士（心理学）

報告番号 甲 第141号

学位授与年月日 2020（令和2）年3月20日

学位授与の要件 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）

第4条第1項該当

論文題目 ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の処理と感情制御

—プロセスモデルに基づく検討—

審査委員（主査） 馬場 史津

坂井 誠

明翫 光宜

高橋 康介

松田凌氏 博士（心理学）学位請求論文審査経過報告書

申請者：松田 凌

論文題目：ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の処理と感情制御

—プロセスモデルに基づく検討—

審査経過：

2019年11月6日（水） 松田氏より教学部大学院事務課に学位請求論文提出。

（心理学研究科長に受理の可否の照会）

2019年11月13日（水） 心理学研究科博士後期課程委員会（心理学部会議室）

受理要件を満たすものとして、論文受理を決定。

同日 心理学研究科委員会（心理学部会議室）

博士後期課程委員会の決定を承認し、論文受理を決定するとともに、学位審査委員会の設置を決定。審査委員4名を選出。

主査：馬場史津

副査：坂井誠 明翫光宜 高橋康介

- 同日 第1回審査委員会（心理学部会議室）
審査日程、審査方針の確認。
- 2019年11月27日（水） 第2回審査委員会（心理学部会議室）
各委員による論文審査結果を検討し、本研究による統計手法の見解やオリジナリティについてより明確に記述するなど、論文の一部修正を求めた。
- 2020年 1月8日（水） 第3回審査委員会（心理学部会議室）
各委員により修正部分を精査、確認し、総合考察に関する記述に一部修正を求めた。
- 2020年 1月27日（月） 第4回審査委員会（心理学部会議室）
総合的に博士論文としての基準に達していると評価し、公示及び公聴会の開催を決定した。
- 2020年 1月29日（水）～2月5日（火） 学位請求論文の公示（心理学研究科長室）
- 2020年 2月5日（水） 公開公聴会（大学院研修室：17：00～18：30）
公開公聴会にて、論文内容の発表と質疑応答を行った。
- 同日 第5回審査委員会（カンファレンスルーム）
公開公聴会でのプレゼンテーションについての評価、また論文についての総合評価と審査報告書案の方針について確認した。
- 2020年 2月12日（水） 第6回審査委員会（カンファレンスルーム）
主査の審査報告書案について検討し、承認した。
- 同日 心理学研究科博士後期課程委員会（心理学部会議室）
審査経過、審査結果について報告した。

松田凌氏 博士（心理学）学位請求論文 審査報告書

ロールシャッハ・テスト（ロ・テスト）は、10枚の異なる刺激に対する多様な反応を総合的に分析することで、被検者の心的様相を理解する心理アセスメントツールである。ロ・テストは主に事例研究により有用性が示されてきたが、その特徴ゆえに、一部のスコアを取り出した数量的研究では十分な妥当性が示されていないことも事実である。なかでも「図版上の色彩に対する反応には、被検者の感情体験や情緒に関するパーソナリティの側面が反映される」という色彩情動仮説は、ロールシャッハ解釈の要となるものでありながら、十分に実証されてきたとは言えない。そこで本研究は、色彩情動仮説を色彩反応の産出過程における個人差と位置づけ、認知課題による実験や行動レベルの特徴と数量的に比較し、得られた知見を改めて被検者個人のプロトコルに還元しながら、多彩な色彩反応の産出過程を検証しようと試みている。

本研究は以下の5章により構成されている。第1章で松田氏は、色彩反応に関する臨床群の分析や、非臨床群の質問紙法を用いた分析では一貫した結果が得られていないことに注目し、認知課題を用いた基礎的な実験的研究の必要性を論じている。さらに、Exner や辻の反応産出過程モデルでは、色彩反応の特徴に配慮した詳細なプロセスが示されていないことを指摘して、「注意の方向づけ」「認知的変化」「反応調整」などのプロセスを経て感情が制御されるとする Gross の感情制御のプロセスモデルを参考にした、新たな色彩反応の産出過程モデルが必要であると主張している。

第2章では、感情制御のプロセスモデルの「注意の方向付け」をロ・テストの反応産出過程における注意制御として捉え、表情画像と情動語を刺激とした認知課題である Emotional Stroop task (EST) を用いた実験を行っている。色彩刺激の処理過程と情動刺激への注意制御を比較した研究1では、色彩優位群 ($FC \leq CF+C$) が形態優位群 ($FC > CF+C$) に比べて高い干渉量を示すこと、干渉量が高い者ほど彩色図版上での混乱が生じやすいことを明らかにした。研究2では、ロ・テストの反応産出過程と EST の干渉量における関連が単純な注意制御の処理から説明できるわけではないこと、研究3では反応産出過程において快感情を刺激するような色彩に注意が向きやすいほど、色彩優位な反応が相対的に多く産出されることが示唆された。

第3章では、Emotion Regulation Questionnaire 日本語版 (ERQ-J) を用いて、感情制御のプロセスモデルの「認知的変化」、「反応調整」に該当する再評価方略と抑制方略の使用を測定し、色彩刺激の処理との関連について検討した (研究4)。その結果、再評価方略と植物反応の関連が示され、植物反応が従来示されてきたような解釈、つまり受動的で肯定的感情状態を示すものとは限らないことが明らかにされた。一方で、感情表出を抑制している被検者に彩色図版上での解剖反応や血液反応が多い結果となり、抑制方略の使用は色彩優位な反応の産出を抑制するが、体験される感情は低減されず、情動性を伴う反応内容としてロ・テスト上には示されることが明らかにされた。

さらに、第4章では特徴的な EST や ERQ-J を示した4事例を取り上げ、これまでの数量的研究で得られた知見を個々の反応過程に適応した解釈として例示している。本章では、不快な刺激から注意が解放できず、反応全体の整合性を確認する検閲が機能しない事例や、II・III図版の強い赤色刺激とVIII・IX・X図版の穏やかな色彩刺激では反応産出過程が異なる事例、強い色彩刺激に対しては基本的に感情を制御しつつ、時に感情を解放するような柔軟な刺激とのかかわりがなされる事例が紹介されている。事例ごとにあるいは1事例の中でも多彩な反応産出過程が展開される様相は、本研究の知見が実際の心理アセスメントに活用できることを明示したものと言えるだろう。

第5章の総合考察では、本論文の結果に基づき、反応産出過程で生じる多彩な感情制御について、モデル化が試みられている。たとえば、被検者がインクプロットの色彩を知覚し、快感情を刺激するような色彩に注意が向いた場合には、その色彩に対する制御過程は生じにくく、色彩優位な反応として産出されやすい。一方で不快感情を生起させるような色彩刺激に注意が向いたとしても、形態に注意を向け、色彩から注意を解放できれば、形態優位で現実的な反応を産出することができる。また、色彩の意味づけを再解釈して不快感情を和らげたり、感情を抑制して不快感情を和らげようとしても、反応内容には不快な体験が示された反応となる場合があること、形態と色彩が統合できないまま混乱がそのままに反応に表れてしまう場合などが示されている。これまでの反応産出過程のモデルに注意制御と感情制御の観点を加えることで、色彩反応と形態水準、反応内容の組み合わせが被検者の感情制御を捉えているとした総合考察は、本研究の一つの成果として評価できるものである。

本論文について Ithenticate により剽窃チェックを行った結果、8%の類似部分が検出されたが、審査委員により類似として指摘された部分を精査した結果、問題はないと判定された。公開公聴会でのプレゼンテーションでは、実験内容がわかりやすく説明され、副査のみならず多くの参加者から質問がなされた。質問やコメントは、EST や ERQ-J を組み合わせた分析ができるのではないかと、色彩反応から被検者の感情制御を端的に読み取ることはできないのか、健常な大学生を対象としたモデルであり、臨床群を対象としたモデル生成が必要ではないかと、よりシンプルなモデルへと推敲する必要があるなどと、研究手法に関するものに加え、今後の臨床的活用の可能性について松田氏の見解を問うものであった。それぞれの指摘に

対し松田氏は、本研究の限界と問題点についての的確に回答し、異なる認知課題を用いた実験研究が海外の専門誌に掲載されたこと、臨床群でのデータ収集についても意欲的に取り組みたいとの抱負が語られた。投映法研究に実験的手法を取り入れ、色彩反応の心理学的意味について新たな知見を提示した本研究の内容と質疑への回答は、松田氏が今後の研究をすすめる資質と能力を有していると評価できるものであった。

以上の審査を踏まえ、学位審査委員会は一致して本論文が学位請求論文として合格であると判定した。